

# どう展開、加工メーカー



自動車、船舶、建築物を製造するのに欠かせない溶接。部材と部材の接着材となるのが溶接材料だ。

造船向けに使われるフラックス入りワイヤ（FCW）、建設向けのソリッドワイヤ（SW）など分類はあるが、部材に適した材料を使わなければならず、素材の種類だけ溶材の銘柄は数多い。

新日鉄住金グループで溶材を手掛けるのが日鉄住金溶接工業（社長・木村寛氏）だ。

10月に発足した「ステイリンク」は新日鉄住金と二次加工メーカーの一体化がコンセプトだが、日鉄住金溶接が身を置く溶材業界は顧客との結び付きが強い世界。販売後も顧客に対し

## ④ 溶接材料 日鉄住金溶接工業

て材料や自動ロボットの使い方などのサポートが必要だからだ。

一方で木村社長は新日鉄住金との連携強化の意義を強調する。「溶材は使い勝手や歩留まりが命。安価で購買したいユーザーに対して、単なる購買価格だけではなく、トータルコストミニマムな製品であることをご理解いただくように、うまく提案していかなくてはならない」。

日鉄住金溶接にとってステイリンクはもう一つの意味で追い風だ。同社はタイに自動車向けの製品工場を持ちつつも、



材料から機器まで多様な商品をラインアップ。スーパーダイマなど新日鉄住金ブランド用の溶接材料もそろえる

# 海外でFCW拡販

低温でも 効率作業 靱性、強度で差別化

これまで国内を主体として「FCW」きた。本格的に高付加価値溶材の拡販に向けて海外を志向したのはつい3年前の

「国内ではシェア2位に位置しているのに、溶材大手の中では海外売上げ比率が目標だ。社長自身もトップ営業で海外を飛び回る。今春からは新日鉄住金なるフラックス（合金剤）海外で鋼材、鋼管を売り込

が一番低かった」（木村社長）。海外顧客と向き合っが海外の顧客にも認識してエージェンツ契約を結び、海外市場で武器と位置付ける商品が、同社が得意とする「低温」、「靱性」、新日鉄住金の研究部門との「何十年にもわたる長年の連携の証左」（同）。研究面では、これまで新日鉄住金が求める溶材の開発が中心だった。今年から日鉄住金溶接が重要な研究テーマに加えることができることとなった。

「強度」を兼ね備えたFCWだ。例えば北海油田などで原油を掘削するためのプラットフォームを建造する際、気温が低く、汎用材料を使った溶接作業は困難だが、同社のFCWを使うことで効率的な溶接が可能となる。また低温・靱性を兼ね備えたFCWは、新製品の研究開発や設備の効率化など、将来への投資をするための資金を投入できる。海外でも利益を稼げる体制を目指す。この体制の確立に向け、ステイリンクが好機となるはずだ。（和田 政憲）

